

渴かない水

暑くて、喉が渴いた時に飲む冷たい水は、とてもおいしいものです。今の時代は、どの家庭にも水道が通っており、店に行けばミネラルウォーターが山積みになっています。真夏の暑い日に屋外を歩いていて自動販売機を見つけ助かったと思ったこともあるのではないのでしょうか。

水はいつでもどこでも手に入る代名詞のようなものですが、ひとたび災害などが起ると、その重要性を思い知らされます。水分補給は死活問題となり、他のどんなものよりも大切なものとなってくるからです。人間の体の60%ぐらいは水分でできており、3日水を飲まないで死んでしまうとされます。

その水について、イエス・キリストはこうに言われました。

「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。」(ヨハネの福音書4章13節)

水はどれだけ飲んでも、それで渴きがおさまるといふことはありません。しかしイエス・キリストは、ここで単に水分補給の必要について語ろうとされたわけではなく、飲み水のことを通して、私たちの心の問題について語ろうとされたのです。

私たちは日々、多くのものを求めて生きています。それはお金であったり、名声や地位であったり、趣味や娯楽かもしれません。それらを手に入れたら、一時の満足は得ることは出来るかもしれませんが、また次のものが欲しくなってきました。

又、今の生活に特に不満があるわけでもないのに、心の中に何か物足りなさを感じる方もおられると思います。フランスの科学者であり、哲学者でもあるパスカルは、自著「パンセ」の中で、「人の心には神以外には埋めることのできない空洞がある」と記しました。

人はこの世のものでは完全に満足することが出来ません。ですからイエス・キリストはこうに言われました。

「誰でも渴いているなら、わたしのものに来て飲みなさい。」

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、

生ける水の川が流れ出るようになります。」(ヨハネの福音書7章37・38節)

「」の聖書のことはをお伝えする特別の集会が開かれます。お気軽にお越しください。